

# チームの力

役立たないと言っているだけでないというわけではない。ただちろん役立たない知識に意味が 成果へのアプローチとなる知識当に現実に働きかけ、望ましいそういうのは簡単だ。だが、本 識が多くの場合、えらそうなわ頭脳の中だけでねつ造された知ある程度確かに言えるのは、 りに役立たないことである。も がどれほどあるだろうか。 う顔を眼前に見る思いがする。 ればならない」、そういうと、「そ んなの当たり前じゃないか」とい 知識は役に立つもの

の他無数の人間的要因を濃縮還は、著者自身の体験や感情やそ 支柱をなすのは構造構成主義と のような本ということである。 少なくとも体験や物語が息づい いう考え方なのだが、そこでは 元して絞り出されたエッセンス 本書を読んでいて感じるの というか、 体験と物語



げている。

た知識であ

像させる。 を主食とする優し い生き物を想

あり、価値の原理、方法の原理、からなる原理を把握する学問で なる体系である。ここで言う 人間の原理といった原理群から 構造構成主義は物事の本質

### 西條剛央 著

ちくま新書 780円十税

ばよいのかと問いを立て、構造うまくいかないのか、どうすれ に一度といわれる大震災下で多 たものがあったからこそ、千年 ところがある。不器用ゆえに、 るが、至言と言うべきだろう。 る。著者は次のように述べてい そうして学問的に積み上げてき く人並みのことができるという として理解することで、ようや はない。苦い経験を経て、なぜ 「私は決して器用なタイプで

野心的な学問がどんどん立ち上がりつつある

援活動を行うことが可能になっどゼロベースで実効性の高い支 洞察できる普遍洞察性を備えた論理的に考える限り、例外なく 未曾有の災害において、そのつ例がことごとく機能しなかった 『原理』とは、いつでもどこでも 理路を指す。それによって、 前

の復興に対して巨大な成果をあ この理説はあの大震災 で生々しく、しかも読む者のエる。そのために、ひどく現実的悩み抜かれ、考え抜かれてい助言は一つひとつ吟味され、を作れたのだと思う」 を挙げることが難しいかを知っ くの人に手を差し伸べるチーム にチームや組織を運営して成果多少の経験ある人なら、いか ゴをみごとに刺す。 その難しさは数学の問

とも知っている。 ンスを踊る難しさに似ているこ 題を解く難しさというより、

ない。著者は実際に震災復興で向に向けていかなければ機能しでもある。それらを創造的な方 苦吟するなかで、 であるとともに、トラブルの源る難しさである。人は価値の源 とものすごく難しいものである。 くは、実際に自分が行ってみる チームの持つ人間的要因に発す たいてい簡単に見えることの多 なことではない。というよりも、 しいステップを踏むことは簡単 特に本書で強調されるのは、 まずもって音楽に体をなじま しかるべきときに似つかわ ある種の 蘊奥

こを理解することが、非常に大 を持っているということだ。そ も、どちらも根拠となる〈物語〉 いのは、賛成の人も反対の人 に到達している。 「少しだけ意識を向けてほ

たちの心に響くことだろう。 この言葉がどれほど現在の私

平野啓 H P -新書 郎 著 720円十

税

ことは、公私にわたって自分自でも、スロー・リーダーである「一日にほんのわずかな時間 ろとなるだろう」 身を見失わないためのよりどこ

多くはいかに速く大量に 法があ

とを日 ピーディーにアクセスし、内容めとするいろいろな資料にス くったりするために、本をはじ くったり、企画提案資料をつ 私たちは明日の会議の資料をつ もちろんそれは大切である。 常的に求められているか し、アウトプットするこ

読むかについて書かれている。 世にはさまざまな読

的要請なのであろう。報時代にあっては、一つの社会いわばインプット法である。情

へのもう一つの扉がある、そん深い奥行きや可能性に富む世界 るのが本書である。 なところに目を向けさせてく だが、「読む」行為にはもっと



実な体験としての読書である」 道ではあるが、着

ではない。それは短期的な成果は単にゆっくり読むというだけである。スロー・リーディングを著者は言う。

に陥っていた。れ、一知半解の グが後々にまで役に立ったかとだが、そのようなリーディン いうと、そんなことはない。特 知半解の読み方に 恒 常

その点、著者の速読の隠れたれるわけではないからだ。 することをそのまま保証してく に読むことが理解し感性を触発

ずお目にかかることができな し遂げたなどという例には、ま「速読法のおかげで偉業を成 弊害を指摘する目は鋭い。

思考を熟成させる方法

読書である。 と確実にしみこんでいくような豊かな長雨が地表にゆっくり あるいは人生全体のため 10 年 の 20

フォーマンスばかりに目を奪われというのも、時間に対するパも読み飛ばしてきたからだ。そいに反省させられる。あまりに 読書 評者自身、 わが身を省みて大

> 謎である」 成功をおさめたのかはまったくであろうが、それ以外にどんな の技術を生かして、本は書けたい。速読本の著者にしても、そ

いるものである。書かれたもの索や推敲、検証を経て世に出てらも、一冊一冊はしかるべき思らも、一冊一冊はしかるべき思らも、一冊一冊はしかるべき思いる。 は 思考の凝縮物であって、

考や理解を誤解しているようにいる。それを速読するのは、思 も思えてくる。 集過程で三か月程度はかかってな本でも書かれるのに半年、編

は、ラーメン屋の大食いチャレだとかいって自慢している人 る脂肪である」 どと自慢しているのと何も変わ ンジで、一五分に五玉食べたな 「一か月に本を一〇〇冊読 h

はそのようともでいる。評者しもその視線は伸びている。評者しない。一人の人生や遠い未来へよの別程は今日明日のことでは一事の射程は今日明日のことでは一事の別程は今日明日のことでは一番である。作家の仕一 高度に実践的である。 る姿勢を好ましく思う。 はそのような視点から情報を語 しかも

の踊子』等、そして著者の作品紀夫『金閣寺』、川端康成『伊豆『高瀬舟』、カフカ『橋』、三島由夏目漱石『こころ』、森鴎外 たどるべき思考の道筋やポイン リーディング」してみることで、 『葬送』などの抜粋を「スロー・



# "人生について"

脳と心にしみ通るごとき言葉の折りに読んでみて、こんなに頭たのだが、しばらく前に何かの に驚きを覚えた。 つむぎ手がかつて存在したこと しいものだと決め込んでしまっ 先輩がいて、以来小林秀雄は難 書く人だなどとしたり顔に言う は意識してわかりにくく文章を 大学時代だったか、

ているような文章なのだ。現代に浮かんでくる映像を見せられ 手は見つかるまい。 においてこのような文章の書き 現実であれ観念であれ、目の前 を言うのだろう。何と言うか、 はおそらくこのような人のこと 「言葉を手足のように使う」と

のがあるのを確認してから手に に平積みしてあったのを見 この文庫本は偶然書店の一角 何編か読んだことのないも 0



ちょっとした満足を感じる。 喉に送り込んでおくことに て、 いものも長いものも、清冽な水れたアンソロジーであるが、短 のようにきらきらと輝いてい ちょっとした雑文をもとに わけても「私の人生観」はぎっ 時にはこんな高純度の水を 編ま

### 小林秀雄 中公文庫 著 629円十税

純度の高い水というのはどんな や思想家の引用もあるけれど、 でくるものである。 心の隙間にでも静かにしみこん なじみの

ビジネスに対話がないからではにふれておく意味を実感する。 からである。 ない。反対に対話がありすぎる 合えるような上質な文章や音楽 に携わる人ほどに、自分と向き 評者は常々、ビジネスの 現場

脳を刺激する名文を

集められているわけなのだが、るいは哲学断章のような文章が広い意味では随筆や随想、あ も及ぶ、恐ろしく長くて高密度 ない角度から思考の槍を刺し込 お勧めする。 の講演録であるが、ぜひ一読を しり組まれた版面で60ページに んでくるところがある。 小林は多くの場合、思ってもみ ちょっと古い時代に書かれ

社会のなかでは通常のものと ころから老成していて、ときに も精神的余裕もとりにくい。 なっている。次から次へとなす りに饒舌な対話状態がビジネス しくとらえられるのだろうが、 婉曲や警句を用いるところが難 て、自分と対話するだけの時間 べきことが自分を追いかけてき 小林の文章はある意味、若い 日々生きているなかで、あま

> であり、 言葉の一つひとつはひどく率直 わけても、「人生について」など な感覚がある。 鉱物のようにフィジカ

から、 が今どれくらいいるのだろうか。段から語る、あるいは語れる論者 か得がたいと思う。体験させてくれる人は、 浩瀚な書物をひもとくかのよう から西洋思想との本質的相違点 ら、仏典における世界観、 いう部分だけで、仏教の歴史か という書生じみたテーマを大上 に、まさに生きた知識の洪水を ソンの斬新さまで次から次へと たとえば、人生観の「観」と フランスの哲学者ベルグ なかな それ

もあった。おそらく数ページ読 学者的な知性を嫌い抜いた人で 実践的な思考の持ち主であり、 るのと違って、小林はきわめて においに誰もが気付くだろう。 むだけで、行間から漂う独特の 「ポケットに名文を」。 しかも、一般に考えられてい お勧め



# 『学者は平気でウソをつく』



もしれないとさえ思う。 がおそらく良い本の条件なのか もつい手にとってしまう本こそ が嫌いではない。分かっていて本がある。評者はそのような本 とが分かってしまうタイトルの を開くまでもなく主張したいこ時々、こんなふうに、ページ 々、こんなふうに、ページ

も飛来する静かな声をクリアなが、ここ十数年ほどで誰の心になかなか刺激的な表題である れる。 言語で表現しているように思わ

うにある。 は明らかである。帯には次のよしてタイトルが誇張でないこと 実際に内容に眼を通すと、決

の権威にもかかわらず、 と称する人々の知見がときにそ 者 金持ちばかり味方する経済 「臓器を診て患者を診ない医 そして、各章ごとに、 何にでもコメントする社 教育現場を知らない教育 いや権 専門家

安寧を脅かすことについて述べ威ゆえにというべきか、市民の てられている。

いようにという趣旨のレトリッ門家の言うことを鵜呑みにしなばでくくられるが、要するに専ここでは「学者」ということ クである。

### 新潮新書 和田秀樹 著 720円十税

ば、確かに現在の専門家には時門家の最上の倫理と言うなら として問題なしとしない。 述べた。まさしくこれこそが専

の信頼性がなくなってしまったもしそこでその専門的知識へ ざるをえない社会なのである。 ら、この社会自体が成り立たな い。誰もが何らかの専門家たら

真相である。学者ばかりではな専門家であるというのが現代のの中心になり、誰もが何らかの世に言うように、知識が社会

専門家をめぐる考察

の現実的な適用によって成り会は人々の見えざる専門的知見いのであって、私たちのこの社できないということはありえな シャの思想家ヒポクラテスは、 るべきである。 立っている。当然敬意を払われ 態にして帰してはならない」と 「来たときよりも患者を悪い状 しかし一方で、かつて もちろん専門家がすべて信用 ギリ

> ではありません」 紀の宗教だったと言っても過言 くなってしまう。それくらいこ て分業されているからだ。 の社会は細かく専門知識によっ 著者は言う。「学問は二〇世

現化している。 識はすでにいろいろな世界で具 確かにそうだ。著者の危機意 裏をとるために、 ニュースなどでは、 おおむね同じ 何らかの

ら、それだけで十分に儲けもの

その説を批判的に吟味するだけ るコメントを述 ような専門家が登場して裏付け そして多くの「非」専門家は べる。

信頼と神聖視は違うからだ。視はやめたほうがいいという。 知見を持たない。 著者はこのような学問 の神聖

というものが巨大な流れが衝突ほど述べられていないが、現代だろう。その観点は本書ではさの失墜に手を貸したものはない とき、 とき、頭脳の中でいろいろな身する摩擦熱の中にあるのを思う しさはここにある。よい問 いくのが愉しいかもしれない。て、豊かに想像しながら読んで の回りの出来事を思い浮かべ でありながらも、一つの知的潮だが、現実には「非」学問的 一つ、一冊の本から得られた 流を形成している世界もある。 刺激的な問いを含む新書の楽 ネットの世界ほど学問の権威 それはネットの世界である。



# 定年後のリアル

り」、前からくるのかと思って それは死にも似て、「前よりし 虚を突く感覚さえ漂う。 いたら背後から襲われるような もきたらず。かねて後ろに迫れ である。徒然草がいうように、 づけばさほど遠くないのが定年 はるけき彼方と思 いきや、

口からの情報がある。地方移住その他いろいろな切り水ー、仕事、趣味、交友関係、 ンルがあって、第二の人生のマ世の中には定年本というジャ

にも当てはまらない。なぜなおそらくこの本はそのいずれ もするし何も学ばなかったよう とでもとらえられる。何かを学 で時に重たい。どこからもどう からだ。その語り口は時に軽妙 著者個人の定年後を語っている ら、飄々たる独白調で語られる な気もする。 んだかと言えば学んだような気

というのはそういうものなの しかし、考えてみれば、 現実

そして、

おそらく他のライフ



< につかんでいるのだと言えるのそのものの実体をダイナミック ことなどできはしない。その意 味で、本書のような語り口のと りとめなさこそが、生きること クリアに正体をつかまえる どうも実体はつかみがた

### 瀬古浩爾

### 草思社文庫 著 700円十税

るとか、そんな教訓めいたこと に想像が可能である。 ごしてきたかに全面的にかかっ どのようにそれまでの時間を過 はいっさい出てこない。 か、こんなふうにすると損をす するなとか、こうするといいと ているのだということは、 ない。あれをしろとか、これを のように過ごすかは、私たちが イベントとまったく同じよう この本は何かを説くものでは 定年をどのように迎え、ど 容易

飄々とした真実

ところにある。 の大事なところは、それが前半一つの通過点であって、通過点 して示されている。 計的にはクリアな定量データと までもなく、 生そのものの一つの結果である の人々が定年を迎えている。統 だが、定年とは人生をめぐる 現在、人口構成を子細に見る 年間きわめて多数

あなたの人生なのだという言外は、それはどんなものであれ、 ところがある。 ころに後ろから襲われるような とが前からくると思っていたと にならえば、人生のあらゆるこ 別なのではない。兼好法師の言 のメッセージである。 ただ一つこだわりがあるの そしてその多くは(きわめて 考えてみれば、定年だけが特

と、そのなかに表れた自分の像

心惹かれてやまぬ境地である。 を受け入れること。地味ながら

には立たない。 上手な受け身をもってしても役 周到な準備や 感じられるの

と言っているように思える。 それらから自由になるのに、定 来上がってきた枷のような観念。 とか、生きるなかで知らずに出 と生きようとか、よく生きよう 年はまたとないよい材料なのだ か、得して生きようとか、きちん めだ。こだわりとかこわばりと ていたように感じられるあきら は、昔の日本人がふつうに持っ

何も起こらず、はっと心ときめ活が営まれ、特筆すべきことは ない。ただたんたんと日々の生 それこそが正確な意味でのリア くことも起こらない。しかし、 るわけではない。人生はさほど著者の語る世界には何が起こ ルである。それでいい。 カラフルなイベントの連続では 飄々と日々を送っていくこ



## 織

が組織のおかげで仕事ができるであることも知っている。誰ものかないのは知っている。諸刃をがはっている。諸刃をがないのは知っている。諸刃をがは、は世の中が立ち ら見ればシンプルな組織も入っ織には表もあり裏もある。表か痛いほどご存じのように、組 ているからだ。 い面が必ずあるものだ。てみればシンプルとは言いがた 一方で、 組織のはらむ闇も知っ

ものばかりなのがいい。ものばかりなのがいい。されるのだが、どれ一つとってされるのだが、どれ一つとっての機微にふれた考え方が展開のが終省を事例に、組織につい やというほど関わってきた人にはない。どれも生臭い世界といしかも、お題目的な教訓話で 組織の生の側



こんな一つひとつの短い一文大きいのは誰もが知っている。 に上司を敵に回すことでは得られるもののは前が回すことでは得らいる。 という。これは組織に関 のなかに、 「上司には決してさから 本数冊分の知恵が凝

だったんだと膝を打つ。ほかになるほど、あれはこの意味 も、「問題人物からは遠ざかる」 る文章にありありと映像がついそのこともあってか、目に触れ ある発言が耳にこだまする。 バい仕事からはうまく逃げる」 「人間関係はキレイに泳げ」「ヤ てくるような印象さえある。 縮されているように感じられる。 人の顔が浮かぶ。聞き覚えの

と思う。建前や理屈、 「生」の現実 あるいは

理念とか道徳だけで生き延びて 理念とか道徳だけで生き延びて であることを であることを はないがなり難しい。という

という誰にとっても避けがたい は、ある種の覚醒したしたたか 環境を自分なりに生きていくに とく賢く」というように、 さのようなものが必要なのだと 「鳩のごとく柔和に、蛇 組織ご

揮される時代だという。

だが、

的確な考察がなされている。

いわば業のような部分から

たとえば、現在は個の力が発

しか見えない、

佐藤 新潮新書 優 著 720円十税

だろうか。 る」などなどー 働きやすい環境は自分でつく ある種の快い痛みを感じな

う。 てくる生の言葉だからだと思ことだからだ。皮膚に直接触れ なぜなら、いずれも、本当の

のようだ。自然の生態も同じだのなかで賢く生きる知恵の事典ら、あたかも組織という生態系ら、あたかも組織という生態系 5

> さもまた一つの魅力と言ってよ見たものを語るリアルさや力強 になるたぐいの知恵である。 書き手自身が組織のなかで経験 る。そして、いずれもが即戦力 してきたものであり、わが目で いうことを切実に実感させられ 例としてあげられるもの ર્ષ

要求するものである。
とこないかもしれない。経験がとこないかもしれない。経験がとこないかもしれない。経験が要があまに対しても一定の成熟を要求するものである。 いだろう。 だが、たぶんこれから新入社

みを感じるに違いない。 しと肌にすり込まれるような痛 を持つ方が読まれると、ひしひ 組織に勤めて10年以上の経験

ほどに生々しくないと心に根づ深い学びに誘ってくれる。ほど 良さしかないものよりはずっとはない。少なくとも口当たりの る読書は、けっして悪いもので この快い痛みをもたらしてく



# |渋沢栄||に学ぶ||論語と算盤|



ぜなら、眼鏡のフレームに似になりにくいところがある。なる面で偉大さゆえに研究の対象を大な業績を遺した人は、あ 察の対象から外されてしまうか のは意識されない。ために、考 て、視角自体を規定しているも

した果てしない努力に思いを寄いのに似ている。その敷設に要ことが何の違和感ももたらさな せる人は多くはない。 る人にとって、ふつうに走れるちょうど舗装された道路を走

近代セショーでつくったものだ。でつくったものだ。キーなどなどは、誰かがどこかキーなどなどは、誰かがどこか 学生のころやらされた「郷土かは埼玉県の出身であるから、小も名前は知っている。まして私 とかねてから思ってきた。誰で 一ほど異様な人間もめずらしい近代史を顧みるとき、渋沢栄 ラたる制度についても言える。 同じことは社会の基本インフ

のころやらされた「郷土

についていささかなりとも説明いのが世の常で、「じゃ、渋沢とが、実像の探求につながらなともかく名が知られているこ

### 同友館 田中宏司 水尾順一 800円+税 蟻生俊夫

きと活動しているさまを見るほどよりは、渋沢が今なお生き生 うが心にすっと入ってくるもの

ったのは、「生きている」感覚 をていねいに訪ねているとこ をでいねいに訪ねているところがかなどく好ましているところにある。 が完溢しているところにある。 本書を一 読して何より気に入

なにも知的刺激になるのかと驚

務者まで、それぞれの立場の執筆者は多勢で、学者から実

# |既知の世界| はどのようにしてつくられたか

りした記録(けっして楽に読める。渋沢自身が書いたり語ったのは一方で正解のように思われたすのあるところから着手する て 軽 るものではないから、 り困難かもしれない。 らく3分間話し続けるのはかな せよ」などと問われたら、おそ ものごとを学ぶとき、 渋沢の研究書のたぐいなしゃしくはお勧めしかね 正直言 リアリ 0

じたいように渋沢を書いてい ばらでないような小人物につい だ。だが、描く人によってばら らだと言われればそのとおり うに、章ごとにあまりにばらば として鮮やかに描いている。 もない。渋沢とは本来そのよう ての本など私なら手にとりたく る。またそれぞれに生きたもの 方々がそれぞれの観点から、論 もちろんこの種の本にあるよ

> というか、知らないことがこん ンス」「味の素」である。 HI」「東京急行電鉄」「アデラ ーが見た魅力」「東京ガス」「I宮創建・永遠の杜」「ドラッカは、「教育イノベーション」「神 な人なのだ。 知らないことばかりだった。 特に私として 0 勧 0)

は、精製と鍛錬を経ていなけれらないか」を教えてくれる情報ネットでよい。だが、何を「知 いかをマッピングする行為なのるための行為から、何を知らなに読書というものは、何かを知 ネットでよい。だが、何を「知だろう。何かを手軽に知るなら ることもあるが、たぶん本来的 かされた。 渋沢という多面 体を扱っ 7

楽しい。 いなければならない。
ばならない。知的に凝縮されて 散策させてくれるのは、 ブックとしての第一 何を知らないかを知るのは心 知らない道を心楽しく 0) 条件であ ガイド



# "ドラッカーを読んだら会社が変わった!

会社が変わった! ドラッカーを読んだら 日本企業による実践の教科書 #### ###

いしいい。に応えた仕事と言ってもよいかに応えた仕事と言ってもよいか もしれない。 のだが、ドラッカーによる荒野いささか宗教臭い評言になる の呼び声を真摯に聞き、その熱

に戻ってしまうの その証拠が のだが――本書ーふたたび冒頭 いだがー

思った。かなのではないかとあるかどうかなのではないかと書物の最終的な価値は、熱が

思うようになった。

本書の中心は、

事例にある。

どのようにドラッカーを自らの

のとそうでないものがある。ても、作り手の熱がこもったも

ものが、この「熱」だった。 のだが、最もそれらに足りない 必要に迫られて手にとってきた

上手に調理された料理であっ

く熱を持つ本である

と胸を衝

これまでも経営関係の書物を



ふぞろい

### 佐藤等 荖

日経 B P 1800円十税

種類の仕事であるのは確かと言りなかなか成功するのが困難な ある。少なくとも私の知るかぎ えれば見えるほどに、並たいて えそうである。 い以上の努力が要されるもので 再構成するのは、ごく自然に見 その放熱のありさまを文章で

けがえのないところ、卓越したねいに見て、鋭敏なところ、か ところを探り当て、 うに、心を開いて一枚一枚てい すぐれた美術品と対話するよ 描ききって

な豊かさ

ある。生きた人間が生きたまま生き生きと血が通っている点でのいちばんの持ち味でもある、

訥々と描かれるなかに、改めてを絞り、日常と格闘したかがを絞り、日常と格闘したかが経営に役立てたかにある。一人 あって、生命そのものである。学問である以上に、運動体で ものが本来的にはらむダイナミかれているほどに、経営という 営者像を見てみると、緻密に描 に描かれている。 ズムを実感させられる。それは こうして実際に生きて働く経

動に駆り立てたようにも見える。

知の巨人の実践精神が著者をし

というよりも、おそらくこの

なって迫ってくる気がする。 おいっそう切実な輪郭をとも ドラッカーの述べたところがな

世界でもある。あるいは、世のしい心の持ち主のみが描きうる 営を描くということは、人を描というのも、つまるところ経 言えばそれまでだが、一言で片 とはそのようなものなのだ」と る。それは緻密で、親切で、 くということと同義だからであ 唆がそこにはある。 付けるにはあまりにも深遠な示 いるように感じられる。「実践 優

ラフルである。

さがいい。人も組織もすべてが者たちの爽快なまでのふぞろい

最後になるが、

登場する経営

ほうっておいても多様であっ

て、多様であるほどに豊かでカ

があった。れない。ふとそう思わせるもの

に多くある必要はないのかもし 屈は私たちがふだん考える以上そこにつけ加えられるべき理

れ、発展を促されもする一方組織も、言葉によって賦活さ 細な生き物ということだ。 余儀なくされることもある、 で、言葉によって停滞と堕落を おりで、つきつめて言えば、 ささやかな存在への配慮あるも あると考える。 う緻密に展開されていくべきで べては言葉の働きである。人も 一文が出てくる。まさにそのと マネジメントそのもの」という この問題意識は、今後いっそ のみに許される仕事でもある。 本書の最終部には、「言葉は 傷つきやす す



### 「すぐ動く人」 は悩まな

現実的に簡単とは限らないのがルなのだが、シンプルなことが簡単なことはたいていシンプ 世の常である。

いほうで、ことが家庭生活にまなかったりなどまだわかりやすんのこと、成果が思いのほか出ない。職場の人間関係はもちろ と、おびただしい数の厄介実際に仕事人生を生きて ものも膨大になってくる。 で及ぶならば、悩みの種という にとりまかれないわけにはいか 介ごと いる

見方の選択肢を示してくれるもとした考え方というか、ものの入な答えというよりも、ちょっ入な答えというよりも、ちょっま践的な書物として成功して実践的な がらも、人生の機微をとらえたて、高い視点から大局を示しなシンプルななかに深みがあっ ものが多いように感じられる。 のが多いように思う。 本書などは概略その条件を満

ある。それが本書のはじめであ単だ。要はタイトルそのままで 思考と内省を促してくれる。 ことがなく、かえって読み手に 言わんとするところは実に簡 おわりである。 読み手を緊張させる

# 改めてこのタイトル 読み手に寄り添う姿勢

とに気付く。 のであって、「悩まない人はす人は悩まない!」と言っているを吟味してみると、「すぐ動く ぐ動く!」とは言っていないこ

実に理解できるのである。

には生きていけない」現実を本

そんな「わたしたちは悩まず

を取られる。評者自身がどちら

かというとそのタイプなので切

のだという。 活を自らの周囲に具現化できる

ことで、悩みにとらわれない生 重視した習慣を身に引き入れる

姿勢を示してくれる知恵であ時に読み手を理解し、寄り添う

の度量を備えた知恵である。

同

よい知恵とは実験を許すだけ

みというものにどう対処するか が、現代では大きな課題になっ がここからもわかるだろう。悩 はなく、悩まないことにあるの だいじなのはすぐ動くことで いることを的確にとらえてい も果てしない。そんな世界に立に溢れ、責任を要求される領域だが、世は膨大な情報と選択肢だが、世は膨大な情報と選択肢がが、世は膨大な情報と選択肢

たされて悩むなというほうが無

つでも前進を促してくれる触発

め、受け入れながら、

わずかず

ありのままの弱い自分を認

### 和田秀樹 1000円十税

まう。要は悩みの底なし沼に足 けない考えに身も心も委ねてし う。しかも、どこにもたどりつ どものことで胃腸を痛める要因 であるほどに考え込んでしま に事欠かない現実がある。 帰ったら帰ったで夫婦関係や子 かれていることが多いし、 その実、かなり過酷な環境に置 などと持ち上げられはするが、現代人はナレッジ・ワーカー そんなときに、まじめで誠実 現代人はナレッジ・ 家に

の反応を手がかりにして別の行然的に何らかの反応がある。こ だろう。とりあえず小さなこと 経験を積んだ人ほどよくわかる 動をとっていく。 してみる。行動を起こせば、 でいいから何らかの行動を起こ の効用は社会生活を長く送り、 てみるということだ。たぶんそ . 行動するだけ 生だ。 このようなフィー どうすれ ば 悩みは 61 F 61 バ 0) 、ックを

森里陽

社会生態学研究者



# 「自分の働き方」に気づく心理学

### 気つく心理学 自分の働き方」に

あいろな問題もあって、悩みはい。というか、科学としての心 での助言から成り立っている。 人生の半分程度は、なにがし が働いている。それだけに、い か働いている。それだけにない かもしれないが、そうではな 尽きない。 ので、理論的な記述を想像する イト ・ルに「心理学」とあ

象は決してめずらしいことでは社できなくなったりといった現に休んでいたり、燃え尽きて出会社では、精神的な問題で長期会社のは、精神的な問題で長期のなことに直面する。たいていのないのがある。

識するのは、多くの場合間違い私たちが外部に問題があると認ことがあった。共通するのは、ことがあった。共通するのは、一時、興味があって、本書の一時、興味があって、本書の

ということだ。 の中にある。自たいていは、 自分自身の心の中、問題は自分自身

現在、

結果として多くの生

うに思う。 ができるという骨子であったよ で、解決への道筋を見出すことを勇気を持って見つめること

さえなっている。政府として働き方は今、政治的な課題に 同じである。

本書もポイントとなる主張

は

青春出版社 加藤諦三

荖

1400円十税

力が休眠状態になっ 7 e V る 0

ある。 本書が関心を持つのは、きわいるかもしれない。 本書が関心を持つのは、きわめてパーソナルな心理的側面である。 に求める人もあろう。社会的な求めるだろうし、行政的な制度 人は経済的なインセンティブに因を認めることができる。ある 私たちはそこに確かである。 いろ ろ っな原

たぶん、 働き方改革などと問

の内面から迫る

事 の現実に個

体や心を持っているところにあが、人間そのものであって、身問題は、労働力というもの もあって、多くの労働力が市場は、少子高齢化に対応すること に出るのを後押ししたい。 力にさらされていると思う。 、先進国ならどこでも似た圧それ自体は日本だけではな 題を巨視的に捉えていくと、ど

てよい。しから、り事の致命的に重要な課題といっまれるということは、仕 が、このような個の心理的な側うしても手が回らなくなるの ているので、個が自らの労働会というのは、個から成り立けれども、つまるところ、 面ということになるだろう。 経済的側面をはるかに 、個が自らの労働をは、個から成り立っ、つまるところ、社 及していくなかで、自分の働きぐる変化は大きく社会全体に波ろう。そして、すでに労働をめ

ろう。そして、すでに労働をめにかかわる助言は参考になるだ

く、そのような個の社会的現実

あまり年齢層にかかわりな

方、そして生き方を見直

す

存的な意味づけを持たざるをえたが、個の人生というレンズからが、個の人生というレンズからの一時的な消失かもしれないの一時的な消失かもしれないの一時のな消失かもしれない。 ない 超えた意味があ

実そのものだからだ。知っている。それは、人が社会知っている。それは、人が社会の以上の意味があるのは誰でも き方を変えるとき」とか、 ただ価値を生み出して賃金を得 立ち上がれる」などである。 きる原点』に戻れば、そこから たときは、あなたの働き方・ んなに仕事で挫折しても、『生 働くということのなかには、 たとえば、「 働くのに つか ど生れ



## あなたが生きづらいのは 「自己嫌悪」のせいで 自由に生きる技術

### 安冨歩 大和出版社 1400円十税

とにした。 読み終えてやはり取り上げるこ 取り上げるのを迷ったのだが、テーマ的に見て、本誌書評に

啓発書の装いをまとっている。 持つ経済学者である。 受賞などのすぐれた研究業績を著者は日経・経済図書文化賞 一見すると、軽い心理系自己

言って経済学者はその傾向が強を語ろうとはしない。一般的にらないし、何よりも身近な現実にいてい学者は自分自身を語 会に対しても深い示唆があるのと、そこには個人に対しても社だが、ていねいに読んでみる は容易にわかる。

者自身の来歴のみならず、誰のこの本のすごいところは、著 してくれているところにある。 ニズムを説明し、 ていねいに取り上げ、そのメカ 、囲にもある身近なことがらを かもしれない。 中では働き方改革や女性 対処法を提示

安富多 なぜ、しんどいのか。 なぜ、うまくいかないのか

歓迎すべきことだ。
歓迎すべきことだ。
ない。
のは悪いことではない。
むしろのは悪がらがらつつあるのは悪がらとではない。
むしろいる
がしている。
ものは
を
が
の
は
で
の
は
の
は
の
は
の
は
の
り
り
の
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り
り

いる。シーンから解き明かそうとして

くぶんの冗長さをものともせその読みやすさの一因は、い ているところにある。 たとえば 問いを中心に組み立てられ

は? ばいけないのか?」 の攻撃を受けないようにするに 「『仕事をしているふり』の人 「人は本当に長時間働かなけれ

「意味のない仕事をふられたら?」

# 立ち止まって心の中を眺めてみる

界とはあまりにも多様に過ぎ へいたる自己の刷新を個別のて、「自己嫌悪」から「自愛」 ないだろう。 どになすべき方図が茫漠として て、そこには唯一のアプローチ 一人ひとりの内面に焦点を当 しまう傾向があるのも否定でき など望むべくもなく、考えるほ この本は、この社会を生きる だが、ともすればミクロの世

紙幅が割かれている。見つける方法についても十分な 対処すべき課題であると言える。 ものであり、誰もがしたたかに お金の考え方、信頼できる人を が、どれもリアリティをはらむ これらは職場に関するものだ 「仕事を干されてしまったら?」 あるいは、母親との関係や、 いずれも、生きるうえで必要

な知識である。

しかも誰も教え

されるのは、さほど多く見られられ、現実的対処の方策が探求られ、現実的対処の方策が探求らえどころのないものが、きちらえどころのないものが、きち ただし、どれについても、著者な回答を与えるわけではない。 らさ」といった、ともすればと 生身の助言が引き出されているな理論や仮説に頼ることなく、 のにとても安心感がある。 ストックに降りていき、うつろ 自身の血肉の通う過去の体験の てくれなかった知識 そして、おそらく、「生きづ 本書は明快 、る

がある。中にその姿を表してくれること きに手にする軽いタッチの本の にしかないからだ。ら離れるし、理論の ズされにくのだが、ふとしたと の世界の中で適正にカテゴライ る例とは思われない。 この種の実践知は なぜなら、 理論の 理論の出自は過去常に理論は現実か なかなかこ

本書などはその典型と言 7

# 本物のおとな論 八生を豊かにする作法

さ 本物 とな 0 論 外山滋比古 知性あるおとな になりたい人へ ペストセラーニ・セイスト 外山道北古波 "畑的人間"の生き方

が、百歳近い現在でも健筆をふエッセイで著名な存在であったら知的な修練と人生経験を経たら知さなりである。 あ、 か、著者と同等に立って、がある。一つは上からという 言わなければならないだろう。ある)のは、ありがたいことと 認めつつ、心の中で頭を下 は、少しばかり縮こまって、 啓蒙的な姿勢である。もう一つ いよね」といったやや高踏的で で無意識にとる姿勢というもの るう(これもまた古い慣用句で ゙まったくできてない自分」を 読み手にとっても、読むうえ 世間にはできてない人も多 著者と同等に立って、 それ自分はできてるけ げて となとして取り上げられている。 ・正直ではなく、白いうそをつ

ただいたような気になった。らかな水を心中に流し込んでいれでもまったく気持ち良く、清は後者だったわけなのだが、そ んこのタイトルで一冊をものすである。「本物のおとな」。たぶそもそも、タイトルが大上段 んにも そ い清

### 外山滋比古 1000円十税 荖

となである。 アイマイな言葉を使うのがお 「私」を消すのがおとなである。

の「わからなさ」を受け入れの「わからなさ」を受け入れない。こなというものはわからない。こも違和感があるかもしれない。ている日本語が昔風で、文体にている日本語が いに違いない。それに、使われさくて役に立ちそうな気がしな マンなどが読めば、 たぶん、 葛藤し続けることがおとな 意気軒昂なビジネ どれも古く

ではっきり分けようとはしていつまるところ、世の中を白黒 ない。おとなと子どもとではっ の語り口は、まったく説教や押いようがない。それでも、本書い仰せのとおりです」としか言 まったく返す言葉がなく、 んだよ」と悠揚である。 なものだよ。そんな感じで し付けではなく、「まあ、そん

のだ。たぶんそれがおとなの知きりと分けようとはしていない 性なのだ。白と黒との間には、 一貫した姿勢である。 に識別するゆとりが本書を貫く デーションがある。そこを繊細グレーの濃淡という無限のグラ

の流れに身を浸すことそれ自体 の流れに身を浸すことそれ自体 い書きぶり、しなやかな知性 いまというか、あえて断言し ない書きば、本書の主張そ なとはわからないものなのだ。 えてくれるようにも思う。 読み手にやさしい感化を与 いもの

## 成熟した知性 の 温泉に身を浸す

さほど多くはいないように感じることができる人は、日本には られる。 たとえば、次のような人がお

えない。

するのがおとなである。・裁くのではなく、他人 くのがおとなである。 ・真似ではなく、自分の頭で考 えるのがおとなである。 他人を応援

遠で茫洋としたおとな像自体とおりで、そんな一見すれば迂というのも、本書で言われる なったからだ。「おとながいなが、私たちの念頭に上らなく もなければ近道もない。答えさなのだと知る。そこには即効性 くなった」のは当たり前である。 となになった」と言われると、 私などは、「子どものままお そしてわかってはいけ な